沖縄のページ

「沖縄の不都合な真実」直視せよ

篠原、エルドリッヂ両氏 シンポジウムで講演

今年1月16日に発売されて以来、沖縄県内でベストセラーを続けている『沖縄の不都合な真実』(新潮新書)の著者、篠原章氏を招いたシンポジウムが9日、那覇市で開かれた。篠原氏は基地経済に関する県報告は信頼に足らないものと一蹴。「真実、事実関係をしっかり見つめる」ことの大切さを訴えた。

(那覇支局・豊田　剛)

シンポジウムに登壇した（右から順に）ロバート・エルドリッヂ氏、篠原章氏、我那覇真子氏、江崎孝氏＝9日、那覇市の沖縄県立博物館・美術館講堂

シンポジウムは「琉球新報、沖縄タイムスを正す県民・国民の会」(我那覇真子代表)の第2回大会の一環で開かれたもので、県民ら約250人が参加した。

シンポジウムには篠原氏と在沖元米海兵隊政務外交部次長のロバート・エルドリッヂ氏が登壇した。質問者として政治ブログ「狼魔人日記」を主宰する江崎孝氏と我那覇氏が参加。基地経済が主な議題となった。

県は「基地経済への依存度は、昭和47年の復帰直後の15・5%から平成23年度には4・9%と大幅に低下している」と説明。翁長雄志知事は「米軍基地は経済発展の阻害要因」と主張している。これに対し篠原氏は「基地経済が県民総生産に占める割合は35%程度」と分析している。

基地が返還されると9155億円の経済効果が生まれるという試算について、「この数字は実体経済と乖離した生産誘致額だ。そもそも基地があることを前提で計算していることが間違い」と批判。「返還地に商業施設を作ってもパイの奪い合いになるだけで、今年、北中城村の基地返還地に完成した大型ショッピングセンターの集客も思うほど上がっていない」と説明した。その上で、「離島の地理的不利性を穴埋めしてくれるのは米軍基地。基地がなくなれば所得水準が3割程度下がるが、その覚悟が必要」と述べた。

沖縄の基地経済依存度35%
米軍機の85%は本土に配備

これについてエルドリッヂ氏は「米軍基地がなくなると自衛隊基地を増やさなければいけなくなる。施設や装備品など防衛費の負担は爆発的に増える」と述べ、米軍基地が沖縄にあることの合理性を強調した。

県内2紙に代表されるマスコミの偏向報道について篠原氏は、「真実、事実関係をしっかり見つめる。そうすれば自ずと次に何をすべきかが分かる」と述べた。

さらに、エルドリッヂ氏は親交のある地元記者による『基地問題』がある限り、いことは書かない」という言葉を紹介。①在沖米軍施設は在日米軍施設全体の75%も占めていない②米軍の軍用機の85%は本土に配備されている――など正確な事実を踏まえて問題解決に取り組むべきだと主張した。

なお、『沖縄の不都合な真実』は沖縄の負の部分を描く本として戦後、最も売れているが、8月9日現在、県内2紙は一度も取り上げていない。

『沖縄の不都合な真実』出版の背景

――篠原章氏の講演要旨

1990年に沖縄市コザを訪れ、報道などで見聞きするような基地の苦しみはなく、見事に住民が基地と共存していたことを知った。戦後、沖縄のイメージを最初に作った人が作家の大江健三郎氏であり、ジャーナリストの筑紫哲也氏だ。

沖縄のことが何でも無条件に好きになる「沖縄病」にかかったこともある。しかし、「癒しの島」というイメージでひとくくりするのは正確ではない。悪い部分を直視して反省しないと成長しない。

沖縄の2紙の論調が大きく変わったのは90年代半ばだ。95年に米兵による少女暴行事件が起き、県民感情を逆なでした。この時期、知事を務めた革新系の大田昌秀氏の影響が大きい。沖縄はいつも正しいという主張や立場を定着させた。

住民が基地と見事に共存

大久保潤元日本経済新聞那覇支局長との共著である『沖縄の不都合な真実』では主に経済的な側面から素朴な疑問を提起した。

①基地に反対するのに、なぜハンビータウン(北谷町)、ライカム(北中城村)など米軍施設の名称を使うのか②復帰後、11兆円の沖縄振興予算がつぎ込まれているにもかかわらず、なぜ低所得のままなのか③なぜ補助金と基地負担はリンクしていないと主張するのか――。

最たる例が沖縄県ロック協会が政府の補助金で設立されたことだ。沖縄では何か事業をするには「補助金ありき」ということだ。

最近になって驚いたことが、県知事の仕事のほとんどが基地問題ということだ。翁長氏は知事に就任以来、何度も上京しているが、ほとんどが移設反対を訴えるためである。翁長氏に安全保障の論争ができるとは思えない。沖縄のアイデンティティー、出自で物事を考えても何も解決しない。

宜野湾はごろも祭りで伝統絵巻

中山王察度生誕のきっかけとなる「はごろも伝説」から命名した宜野湾市の一大イベント「宜野湾はごろも祭り」が8日と9日に開催され、旗頭行列＝写真＝、エイサー踊りを含む歴史絵巻行列、カチャーシー大会などが華やかに行われた。

ちゅらかじ 美ら風

KAZUYAのトークライブ

動画投稿サイト・ユーチューブのKAZUYAチャンネルを運営するKAZUYAこと京本和也氏とチャンネル桜「沖縄の声」のキャスターを務める我那覇真子氏によるトークライブが7月25日、那覇市のパレット市民劇場で開かれた。

台風が直撃し開催そのものが危ぶまれたが、強風にもかかわらず開始前から若者を中心に長蛇の列ができ、会場はあっという間に400席が埋まり立ち見も出た。

トークショーでは翁長雄志知事が普天間飛行場(宜野湾市)の名護市辺野古移設に反対しながら那覇軍港の浦添沖移設を推進するという矛盾、環境保護主義者がジュゴン保護の理由で辺野古埋め立て反対を主張する一方で辺野古沖にはジュゴンがほとんど生息していないこと、憲法改正の必要性などがテーマになった。通常メディアでは見聞きすることのない目からウロコのトークに聴衆は引き込まれていた。

最も印象に残ったのは最後の一言だ。

我那覇さんが「知識の詰め込みや議論は大事だが、最も重要なことは家族を大切にすること。自分の面倒を見てくれた親を自分が面倒見なくてどうするのか」と社会の最小単位である家族を守ることがすなわち、国家を愛することと締めくくった。

KAZUYAさんは、「戦後70年たって、犠牲になった命があって今の発展があることに感謝しなければならない」と述べた上で、「国民一人ひとりの努力が国家の繁栄を支え、未来を決める」と若者に対して勇気ある行動を促した。

高3の女性は、「KAZUYAさんの自然体な話し方に引き込まれ、政治に対する考え方が変わった」と話した。(T)

情報プラザ

催し

▼記者を囲む会　13日(木)午後7時開始、沖縄県立博物館・美術館講座室(那覇市)で。「国家の危機と沖縄の重要性」と題し、世界日報社の早川一郎政治部長が講演。安保法制の重要性、安倍政権の現状と課題を詳しく解説する。質疑応答の時間もある。入場料＝500円。問い合わせ＝世界日報社那覇支局(電)090(1945)9217。

▼海・夏まつりin糸満　15日(土)と16日(日)、糸満漁港地区(糸満市)で。糸満ふるさと祭り、南部豊かな海づくり大会、沖縄爬龍舟フェスティバルの3イベントが同時開催＝写真＝。海人のまち糸満で夏を一気に楽しめるイベント。花火大会もある。問い合わせ＝糸満市商工観光課(電)098(840)8135。

▼与那原大綱曳まつり　15日(土)と16日(日)、午前10時開始、御殿山青少年広場(与那原町)で。440年の伝統を誇る与那原大綱曳は16日午後5時開催。その前後にはエイサー、大綱曳道ジュネージョーなどが行われる。締めくくりは花火大会。問い合わせ＝同運営委員会(電)098(945)5323。

Viewpoint 8

月刊 ビューポイント ●定価 514円(税込)
世界日報社 〒174-0041 東京都板橋区舟渡2-6-25 TEL.03(3558)3417
www.worldtimes.co.jp
August 2015

日韓国交正常化50年―識者に聞く

交流テーブル作りから／日韓連携はアジア平和の礎／対日外交は原則より国益重視で／ポピュリズム強まる政治／「従北」隠し反日主張／「日本捨て中国接近」は誤解／大事にしたい「双子の国」

―世日クラブ講演― 大阪大学名誉教授 中村仁信
低線量放射線は怖くない～フクシマのこれから

第10回平和と繁栄のための済州フォーラム 公益(倫理)資本主義を世界へ!!
広がるソフトパワーで存在感増す台湾 世界の潮流 同姓婚全米で合法化
●ワールド・スコープ 国際機関の転居話相次ぐウィーン
●対訳ワシントン・タイムズ 軍に北極圏の海氷を監視させるオバマ氏
●山田寛の国際レーダー 頑張る母たちへの応援歌／サミット今昔感
沖縄時評 翁長知事訪米は大失敗 内村鑑三を読む 自由主義の産出所、欧州
PHOTO GALLERY 「沖縄慰霊の日」の戦没者追悼式 防衛レーダー 幼稚な安保論争
沖縄 大型MICE施設 東海岸地区に決定―集客、採算性、工期完成に疑問
少年義勇兵だった玉城幸助氏に聞く―玉砕した伊江島、「集団自決」強要なし

慰霊の日 沖縄戦没者の冥福祈る
首相「世界平和に不断の努力」
徳川康久靖国神社宮司が講話―沖縄県護国神社
「慰霊と世界平和を語れる地」

●上昇気流 ●データを読む ●戯ヤラリー ●地球だより ●メディアウォッチ ●読書

インタビュー モディ政権の1年と日本―岡本幸治
論壇時評 親韓派日本人の韓国離れ／「2025年問題」への備え
文化 「トキのおじいさん」村本義雄さん 中国トキの保護活動を続ける
教育 「集団自決」めぐる沖縄の教育 副読本は依然「軍令」明記
東京都豊島区 薬物乱用防止テーで教育関係者ら討論 「地下」に潜る危険ドラッグ

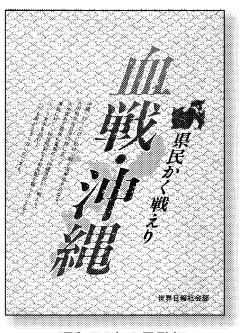
血戦・沖縄

県民かく戦えり

近日発売 好評・ご支持を頂いている 復刻電子版(PDF)第3弾!!

沖縄体験者は異口同音に語る――
「私が死んでいても不思議ではない」。
いま生きている私は、誰かによって生かされているんだ、というのである。
「誰か」とは。
それはうまでもなく、斃れていった家族であり、隣人であり、先輩後輩であり、多くの同胞である。

沖縄へ行くたびに私は小禄の海軍壕を訪ねる。大田司令官自決の跡に立って、大本営あて最後の電報の「沖縄県民かく戦えり、県民に対し、後世特別なる御高配を賜らんことを」という文字を読むと、いつも涙が止まらないのである。



昭和59年8月発行
世界日報社会部 著
フォーマット＝PDF
販売価格 1,200円(+税)

ご購入は
Viewpointブックス
http://book.vpoint.jp/
世界日報社 電子メディア部
TEL.03(3558)3612 E-mail:vpbook@worldtimes.co.jp